トピック

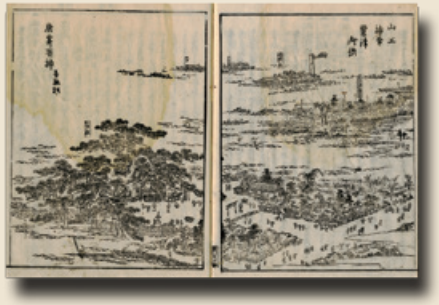
絵画作品で追う

「唐崎の一ツ松」の成長ぶり

1．琵琶湖岸きっての名所「唐崎の一ツ松」

「大津事件」の当事者、ロシア皇太子ニコライが、大津の遊覧で立ち寄った名勝のひとつが唐崎の松でした。この松は、『万葉集』に収録された柿本人麿の歌をはじめ、奈良時代以降、多くの詩歌に詠まれ、播州曽根の松、奥州高舘の松と共に日本三名松と呼ばれてきました。

また、唐崎の地は、平安時代には桓武天皇の行幸（803・4年）をはじめ、清浄な場所（祓所）のひとつとして、多くの貴族・文化人の参詣がありました。



図T-1　『近江名所図会』唐崎明神 孤松

そして、時代は下って江戸時代中期の終わり頃。当時は二代目の松がその威容を誇り、松の繁栄と長寿にあやかろうとする人々ばかりでなく、女性の病にも御利益があるという信仰が高まって唐崎大明神と崇められ、参詣者が増加したようです。

図T-1の『近江名所図会』(1797（寛政9）年)に描かれた「唐崎明神」を見ると、鳥居前から西近江路へつづく参道付近には店が軒を連ね、多くの人々が往来しており、その賑わいぶりがうかがわれます。

2．「唐崎の一ツ松」を描いた摺り物

その参詣者目当てに、唐崎神社では松を描いた摺り物を販売していました。

まず、図T-2は、天明～寛政期(1782～1800)の版行と推定されるものです。描き手は、当時の京都における名門の絵仏師、長谷川等潤。神木を描いた摺り物なので、絵師と神社の印が実際に捺してあります。その描写からは、龍の巨体がくねる様を想わせる幹や、全方位に広がる枝振りの見事さを見て取ることができます。

ちなみに、この時点で、松のスケールは、おおよそ、東西30間、南北38間(1間≒1.82m)と記録されています。

図T-2　唐崎大明神 一ツ松正面西向之図
長谷川等潤画

続いて図T-3ですが、江戸時代の京都文化人名鑑であった『平安人物志』(文政5年・13年・天保9年版)にもその名がみえる福地白瑛(円山派絵師)が手がけた摺り物です。文政から天保の1820～30年代の作と思われます。

その描き方は、等潤画(図T-2)に比べ松葉繁みが様式化しており、整った樹形になっています。ただし、松のアングルは大差なく、等潤画に比べ北斜めから眺め、大きく枝を広げた神木が懐に社殿を抱く構図をとる点、双方同種の摺り物といえます。無論、相違点もありますが、ここで注目したいのは、松がスケールアップしている点です。白瑛画（図T-3）の記録では東西40間、南北48間と、ともに10間も大きい数字となっています。

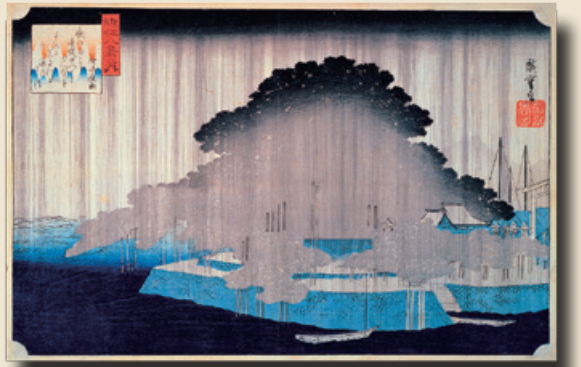
図T-3　唐崎大明神一ツ松之図 福地白瑛画

3．歌川広重の「唐崎夜雨」

さて、第3の摺り物の代わりとして図T-4の、歌川広重の「栄久堂板　近江八景之内　唐崎夜雨」に眼を向けたいと思います。広重がこの図を含む〈保永堂・栄久堂板〉近江八景の8枚セットを手がけたのは、ヒット作の「保永堂板　東海道五拾三次之内」の直後、即ち1834（天保5）年頃です。白瑛画とその時期が重なります。そうです。広重が見たのも東西約73m、南北約87mに成長した枝ぶりでした（彼のスケッチ帖にも描かれている）。

保永堂・栄久堂板の描写は、広重が手がけた他の近江八景物に比べ実景に近く、すぐれた臨場感をみせているのですが、とりわけ唐崎夜雨にみる巨松の存在感は際立ったものとなっています。広重はこの松の枝振りの特徴を三次元的に熟知していたかのように、北側の湖上から眺めることによって、従来描かれることのなかった見事な樹形を発見しています。広重の名作は、「唐崎の一ツ松」にとって、最も良い枝ぶりの時期であったことにより生まれたといえるのではないでしょうか。

ちなみに、この二代目の松は1921（大正10）年に枯死してしまいますが、それ以前の1876（明治9）年に、この松をやはり摺り物同様の構図から写生した岸竹堂の「大津・唐崎図屏風」(㈱千總蔵)があります。同作品をみると、この時点で、すでに樹勢が衰えはじめて松葉が減少しており、広重が目にした巨樹の面影が失われつつあったことが分かります。



図T-4　栄久堂板 近江八景之内 唐崎夜雨　歌川広重画

図T-1、図T-2、図T-4：大津市歴史博物館蔵

大津市歴史博物館　横谷 賢一郎